

郷土研究 伊丹公論

復刊
第25号
通巻44号
年3回発行

発行所
伊丹市立図書館ことば蔵
〒664-0895
伊丹市宮ノ前3-17-14
電話 072-784-8170
編集
伊丹公論編集委員会

一世紀の歩み歴史館に

東リが創業百年機に改装



会社の歴史が学べる2階展示場
(案内は東リ社員、岩本早起さん)



東リ インテリア歴史館

床材のリノリウムをご存じだろうか。それを東洋で初めて製造したことで知られる東リ株式会社(東有岡5)が、12月1日に「創業百年」を迎える。今年4月に新装オープンした「東リインテリア歴史館」には、同社の輝かしい歴史が展示されている。

金沢から伊丹へ

創始者の寺西福吉は、明治3年(1870)、金沢市生まれ。横系に稲縦系に綿を用いた「由多加織」を開発し、金沢でその

生産体制を築いた。

敷物として海外への輸出を想定したが、神戸港まで製品を運ぶのは大変。このことを親交のあった兵庫県職員の田中頼之助に相談したところ、自身の住む伊丹町を紹介され、移転を決意。伊丹の地で由多加織合資会社を設立した。

リノリウムと出会う

寺西は神戸の貿易会社でリノリウムと出合った。リノリウムとは、1860年にイギリスで開発された床材で、木粉や亜麻仁油を原料とする自然建材の一種。寺西は、その耐久性などから今後日本の床材に用いられる時代が来ることを予見。研究を重ね、国産化に成功した。その後生産体制は徐々に確立され、由多加織事業を吸収する

(1977)、製造停止を決断した。一方でカーテンや壁紙へと事業を拡張、平成3年(1991)、社名を現在の東リ株式会社へ変更した。

オリジナル商品続々

東リの強みは、オリジナル商品の開発。「海外のものをそのまま日本に入れてもなじまない。日本文化をコンセプトにしたデザインと、長く使用していただける機能や品質を大切にしている」と、佐藤弘幸広報企画部長(56)は語る。

総合インテリアメーカーへ

かつて日本の床材の代名詞だったリノリウムだが、戦後の高度経済成長期になると、塩ビ素材が台頭。生産効率の劣るリノリウム事業は徐々に縮小を余儀なくされ、ついに昭和52年

開発。大阪国際空港の到着ロビーや、図書館ことば蔵のフロアなど、市民の身近な施設にも東リの製品が採用されている。

100年の歴史がここに集約

「東リインテリア歴史館」は、元は創業の翌年に管理棟として建設された。設計は近代建築家の渡辺節。「ハーフティンバー様式」と呼ばれる、柱や梁を外に露出させた造りを現在に残しており、日本近代建築の黎明期を知ることができる貴重な建物だ。平成19年(2007)、伊丹市の景観重要建築物に指定されたが、建物の老朽化に伴い、1年をかけて耐震・改修工事を実施し、創業百年の今年4月、リニューアルオープンした。

館内には同社の原点である国産初の「リノリウム」などが展示され、1世紀にわたる商品開発の歴史が学べる。

豊かな住空間づくり目指して

例えば、車道にある自転車専用レーンのように、床材の色を使い分ければ人はその境界線を意識する。インテリアは、空間をデザインするための重要な役割を果たすと同時に、インテリアがもたらす効果は多岐にわたる。ユニバーサルデザインの導入が進む昨今、ますますインテリアのニーズは多種多様なものになるだろう。「次の百年も、より豊かな住生活空間づくりに貢献していきたい。東リの挑戦は続く。」

◇ ◇
「東リ インテリア歴史館」
平日午前10時～午後4時。入場無料。見学希望者は、希望日の1カ月前2日前までにあらかじめ東リ総務部 ☎06・6494・6622へ。

おせいさん 永遠に

「お別れの会」など追悼イベント開催

「おせいさん」の愛称で親しまれた芥川賞作家、田辺聖子さん



大好きなスヌーピーに囲まれる田辺聖子さん―霜越春樹氏撮影

聖子さんを追悼するイベントが、伊丹市内で相次いで行われた。

田辺さんは、昭和51年(1976)から伊丹に住み、多くの作品を伊丹の地で執筆。伊丹市名誉市民となり伊丹大使、ことば蔵名誉館長も務めた。令和元年6月6日、91歳で死去した。

ことば蔵は6月12日から追悼コーナーを設け、田辺さんの写真や直筆の原稿などを展示。田辺さんが好きだったバラのイラストを添えたメッセージカードを置き、来場者に自分の好きな作品と田辺さんへのメッセージ

を書いてもらった。図書貸出カウンターでは、図書の貸し出し時に渡す「貸出期限票」の裏面に、田辺さんの代表的な作品のタイトルと内容の紹介文を印刷し配布した。これを参考にして本を借りた人もいた。

8月3日には、伊丹シティホテルで、「お別れの会」が開かれた。祭壇は、カーネーションなどの花で本を大きく開いた形にデザインされ、田辺さんが愛したスヌーピーのぬいぐるみと一緒にほえむ遺影が飾られた。親交のあった関係者約150人

が献花。一般献花には、330人が訪れ、会場に展示された田辺さんのドレスや思い出の写真やお気に入りの品などを熱心に見ていた。

9月7日には、柿衛文庫理事長の坪内稔典さんが追悼イベント「ことばの花火大会」を企画し開催した。田辺さんの著書にちなみ「言い寄る」をテーマとして、参加者約90人が、川柳・俳句・短歌のうちのいずれかを創作。参加者の挙手で最優秀賞を選んだ。また、田辺聖子文学館副館長の中周子さんが、「田辺聖子さんの愛した短歌と俳句と川柳」と題して講演した。ことば蔵では、館内で募集したメッセージカードと「お別れの会」で集まったカードを、一冊の小冊子ZINEにまとめて館内で展示する。